平成２９年度第２回文化芸術に関する意見交換会　会議概要

１　日時　平成３０年３月７日（水）　１０時００分～１１時５５分
２　会場　ときわ会館５階　中ホール
３　出席者（50 音順　敬称略）
＜委員＞
赤津　郁江／あらい　太朗／五十嵐　健一／井藤　仁／石上　城行／大沢　英子／久米　尚子／佐復　恵治／茅野　憲一／長井　武志／宮内　則幸／山田登美男
＜事務局＞
蓬田スポーツ文化局長／大西文化部長／山田文化振興課長／海津文化振興課長補佐兼文化振興係長／小暮国際芸術祭係長／柳沢主任／藤田主任／飯島主事／円城寺主事／野田主事
＜欠席者＞
石川　護／森口　達治
４　テーマ
（１）国際芸術祭開催概要について
（２）基金を活用した市民文化活動の支援事業について
公開又は非公開の別　公開
５　傍聴人の数　２人
６　会議
（１）開会
（２）スポーツ文化局長挨拶
（３）新規委員紹介
（４）事務局紹介

委員長	次第の５、テーマ（１）、国際芸術祭開催概要について、事務局から説明をお願いしたい。
事務局	＜事務局より説明＞ ・資料１「さいたま国際芸術祭開催概要」に基づき説明
委員長	説明が終わった。ただいまの説明に対する質問等も含め、何か意見はあるか。 感想でも質問でも構わない。

委員	東京フェスティバルが何なのかよく理解できなかった。いわゆるオリンピック関係のオリンピアードでこういった文化芸術等と組み合わされるということだが、これは東京都が行うフェスティバルなのか。では、千葉はどうなるのか、神奈川はどうなるのかという全体像がよくわからなかったので、説明をお願いしたい。
事務局	東京フェスティバルについて、今オリンピックというのは大会組織委員会があり、東京都や、国、その他機関で構成された実行委員会形式の大会組織委員会というのが発足して、森喜朗会長のもと、今オリンピックの開会準備を進めているところだが、全体としてＩＯＣ憲章によれば、スポーツだけではなくて、オリンピックの中では文化的な事業も行うようにという規定がある。そのため、スポーツだけではなくて、開催都市においては、こういった文化プログラムを大会の一環として開催しなければならないという規定がある。その中で、東京オリンピックの大会組織委員会が実施する文化プログラムというのが、この東京フェスティバルとなっている。 本市としては、開催都市ではないが、会場が所在する自治体なので、この東京フェスティバルの一環として、国際芸術祭を開催することにより、ＩＯＣ憲章の期待に応えるということを目的とするものである。 これとはほかに、応援プログラムといったものがあり、これは会場所在自治体でないところは公式のマークは使えないが、応援しているということで、オリンピックの大会組織委員会の公認を受けたプログラムを実施することができるが、本市としては会場所在自治体なので、このマークを使った形でオリンピックのプログラムの一環として国際芸術祭を実施していきたいと考えている。
委員	繰り返しになるが、いわゆる神奈川、千葉、立場は同じだと思うが、そちらでも実施するということでよろしいか。
事務局	会場が所在している自治体においては、実施する可能性があるということである。 全体的なものが見えていないので、その一環として実施する

	かどうかというのは、未確定となっている。現時点で、情報はこちらでは持っていないという状況である。
委員	いわゆるオリンピックの文化の部分で、そうしなければならないのか、未確定だと思うが、要は他の各地でも開催がされることになる。その文化の部分で、誰かが取りまとめているということはないのか。
事務局	全体の取りまとめは、大会組織委員会で行っている。 公認プログラムという形で申請が上がって、それを認証するという形で進めていく。
委員	まず、さいたま市は手を挙げる予定だということでよろしいか。では、その組織からは何か、いわゆるお金が出るとかいうことはあるか。
事務局	補助金等はない。オリンピックのマークが使用できるということになる。
委員	トリエンナーレの３年に１回をオリンピックに合わせ、２回目の開催が４年後になるということになったと思うが、それでトリエンナーレという名前が合わないので、この芸術祭になったということだが、その次はどういう予定なのか。今の段階ではわからないと思うが、要はオリンピックだというので一気に実施すると、多分その先が消沈するような気がする。そうではなく、さいたま市としては定期的に３回、４回と打っていく中の第２回として捉えているのか。それともオリンピックに合わせて一気に実施するということか伺いたい。
事務局	基本的に国際芸術祭トリエンナーレは、３年に１回で、2016年に開催したので、本来ならば次回は2019年の開催だが、オリンピックに合わせ2020年の開催を考えている。これはほかの都市にもあるが、何かの都合により３年に１回を１年だけずらすということもある。我々の思いとしては３年に１回ということなので、2019年に３年を足して2022年等を考えている。ただ、これはまだ市としても、全体としてオーソライズされているも

	のではないので、想いとしてはそのような想いである。
委員長	ほかに質問はあるか。
委員	８番のディレクターについて、このような全国的なものは、誰かが中心になって行ったり、とりまとめないと、うまくいかないと思う。前回のトリエンナーレで芹沢ディレクターを選出されて、今回この企画提案方式の方法を実施している形をあえて明記しているが、前回はどういう形で芹沢ディレクターに決まったのか。参考までに経緯を教えて欲しい。
委員長	前回の芹沢ディレクターの選出は、もともとのさいたま市の計画、文化芸術都市創造計画を策定するために推進役となった加藤種男先生の推薦である。この計画を推進するに当たっての重点プロジェクトである国際芸術祭トリエンナーレ、そのディレクターとしてふさわしい方を何人か候補者として挙げていただき、その中で事務局の方で選定をし、お願いをして引き受けていただいた。その際は、公募ではなかった。
委員	経緯はわかったが、他の方ではなく、芹沢さんに選定した決定的な理由というのは、どういうところだったのか。
事務局	さいたま市が第１回のさいたまトリエンナーレを行う際に、その趣旨に賛同してくれたほか、色々な諸条件が合致して、本人の意思と照らし合わせ御協力いただけるというところで、お願いすることができた。
事務局	補足をすると、加藤種男先生は文化芸術都市創造計画の審議会の会長も務めていただいた方で、国の文化政策審議会の委員も務めたりしている。そのような方が中心となり、計画も策定し、トリエンナーレ基本構想もつくったが、その時にディレクター候補者を、さいたま市の文化芸術都市創造計画に位置づけた重点プロジェクトであるトリエンナーレではこのような人がいいのではないかと複数名出していただき、その方々にそれぞれ打診をしたが、都合により難しい等あり、最終的には芹沢ディレクターになったが、一つの理由としては実績があった。

	それと、初めての国際芸術祭、トリエンナーレだったので、ある程度経験、年齢を重視をさせていただいた。これは実行委員会の下部組織である運営会議というのがあり、市長以下、副会長であるところの人達が集まった会議の中で決定したという経緯がある。
委員	今回この企画提案方式での公募に切りかえているが、今と同じ方法でもディレクターを決めることはできたと思う。
事務局	選定過程をもう少し明らかにしたいというのが１つと、若手の起用をしていきたいという狙いがあった。今回、国際芸術祭の目的の一つに人材の育成があるので、若手の育成ということで、ある程度プレゼンテーション形式で企画提案し、いいアイデアをお持ちの方を積極的に採用していきたいという思いがあったので、引き続き芹沢ディレクターには参与という形で、アドバイザー的だが、実行委員会には加わっていただいている。今回はそういうスタイルをとらせていただいた。
委員	別にそれがいいとか悪いとかの問題ではなく、オリンピックのマークにしろ色々な意味で何かを選定する場合というのは非常に私たちも含め国民は敏感になっている。今回キャラクターも、つい先日決めていたが、小学校各クラスというか、あのような形をとったという、ある意味では別にいいとか、それもいいとか悪いとかではなく、そういう形式で決まったという、経緯をできるだけオープンにしてというのが、多分一つの目的ではあったと思う。 ディレクターに選ばれて色々行う場合、実際５億、６億程度の金額というのも想定する形で、非常に大きなお金が動くことも確かなので、ある意味ではどうしてもそこにみんな集中して、選ばれるという形のことに対しては非常に敏感なので、多分相当気をつけても何か色々言われることも出てきてしまうと思う。経緯を私も余りよく知らなかったため、確認させていただいた。
委員	トリエンナーレという名称について、なかなか理解しづらいというのが確かにあり、前にも議論されたことがあったと思う

	が、それを芸術祭と改めるというか、新しくするというのは非常に結構なことだが、さいたま国際芸術祭というのと、さいたま芸術祭、国際を抜いたのと抜かないのとは、どういう意図があるのか、その辺を聞かせていただきたい。
事務局	国際芸術祭のもともとの定義というのはない。ただ、一般的にほかで開催されている国際芸術祭の共通項を申し上げると、様々な国のアーティストが、その土地の文化、歴史、そういうものを取り上げて、その土地の文化の発信を市外、県外、国外へ発信していく。そして、それが逆に言うと市外、県外、国外からお客様を呼び込み、国際がつくことによって多くの情報を発信し、そしてまた来ていただくということとなる。
委員長	一番最初に国際芸術祭の定義がないとおっしゃっていたが、捉え方に幅があることがわかった。
委員	まず、ディレクター選任の件だが、この中で地元出身の若手を採用することを視野に入れる、これは大変いいことだと思う。やはり地元の文化を知らない人は、色々と理解が少ないと思う。深掘りしていかなくてはいけない時代において、地元の文化をよく理解した上で、なおかつ若手の新進気鋭の意見も入るということは、大変いい項目がここに入っているなと思う。 それから、国際の件だが、私ども盆栽に限っては、もう盆栽美術館には45カ国の外国人がいらっしゃっている。今や国際抜きでは盆栽は語れない時代に入っているぐらいに盛んな時代に入っている。後で申し上げるが、盆栽は国際芸術の分野に入っていて、大変幅広く、今日お集まりの中の人形の方とか漫画の方とか書道とか、市内の重要な文化には多くの団体がある。そういう方も含めてクラブを設置して、具体的に後で意見を述べさせていただきたいと思う。
委員	実は、きのう指定都市会というのが東京であり、横浜と浜松と京都の市長がいろいろ自己アピールをされていたが、それをお聞きし、さいたま市が何が得意かということを全国に発信できるものを、やはりここで取り組んでいかなければいけないなとつくづく感じた。さいたま市が、全国または世界に発信でき

	るものは何かと考えると、交通、鉄道のまち、それから盆栽、人形、食ではウナギ、これは割と全国に発信できる素材だと思っている。 　きのう京都市長は、日本に京都があるからよかったと、これからは世界に京都があるからよかったのだというようなアピールをしていた。これはすごいなと思った。日本にさいたまがあってよかったなというようになるのは、なかなか歴史的に難しいところはあると思うが、首都圏にあって横浜、千葉、それから指定都市ではさいたまだが、この首都圏のさいたま市が個性を発揮するには、やはり地元の今までの文化、人形であり、それから鉄道であり、盆栽、これは全国ネットでアピールできる素材だと思う。まずは、そこを発信の基盤にして、それぞれを段々と大きくしていけば、個性豊かなさいたま市がアピールできるのではないか、全国版になるのではないか、つくづくと感じて帰ってきた。
委員	では、８番のディレクターのところと、２番のテーマの関係だが、ディレクター公募に際して、企画提案方式となっている。テーマについては、今回の資料でいうと、新しいディレクターが選定され次第テーマを決めるというようなことが書かれているが、テーマもなく、一体企画提案って何を提案してもらうのかなというのがよくわからなかったのが１つ。 　それと、地元の採用を視野に入れるのは、大変賛成だが、視野に入れるというのはどういうことか。公募する際に、さいたま市の出身者に限定してしまうのか。もう単に広く公募して、実は裏ではさいたま市のことを考えるのだというのをすると、公募にしては、失礼なことになってしまわないか、そういう手続的なことも余りよくわからなかったので、まず、テーマと企画提案のところの関係性を教えて欲しい。
事務局	テーマについては、前回もそうだったが、ディレクターの専権事項というか、ディレクターと一体となって決めていくもので、ディレクターの方については、最終的にはテーマを一緒に提案していただくため、テーマについてはディレクターと検討するという言い方にさせていただいている。 　そして、地元を視野に入れという言い方にさせていただいて

	いる。
委員	今の件で言うと、企画提案してもらうのは、全くフリーハンドで企画提案してもらうのか。
事務局	こちらに書いてある応募における視点というのを踏まえたレポートを提出いただいて、その上でテーマを含めて提案していただき、それが本市における国際芸術祭にふさわしいと判断されたものについて、そしてそれをやっていただけるという方についてお願いするという、そういう仕組みとなっている。
委員	今、おっしゃったように目的があるが、実際にやろうとしたときのテーマと折り合わないことは出てこないか。
事務局	そこについては、提案の内容を含めてコミュニケーションを進めさせていただき、すり合わせを行っていくという形にさせていただいている。最終的には、実行委員会の承認を得て開催計画のほうが計画されるという形になっている。 あと、地元を視野に入れというところだが、いろいろとこちらとしては、人材の育成という観点で、国際芸術祭ということで、極端な話で言えば外国の方でもいいわけである。少なくともこの地域について興味を持っていただいて、それでそこを深く掘り下げていただいて、我々だけではなし遂げられない盆栽の活用であるとか人形の活用であるとか、そういった地域資源を外の視点でもって見ていただいて、うまく表現していただく。そういうことを想定しているので、そういった問題意識を持たれている方、そういった方にぜひ来ていただきたいということで、視野に入れという、こういう、できれば地元出身の方が、そういう方がいらっしゃれば一番いいが、そういったことを念頭にこのような表現をさせていただいている。
委員	口当たりが爽やかだが、実態が、最終的には何か外れたところに落ちつくのではないのかという懸念というか、そういうことのないようにしていただければ、公募する条件は今の話を聞いていると難しいなと感じた。

委員	前提として、これを見る限り、これから公募するという感覚で皆さんいらっしゃるのではないかと思うが、もう公募が済んでいるということはご存じか。
委員長	せっかくなので、現在公にできる、どういう状況なのかというのを少しお話ししていただければと思う。
事務局	まず、この開催概要だが、去年の夏に、こちらの最高意思決定機関であるさいたま市の戦略会議、都市経営戦略会議で決定したものである。そのため、今日いただきたい意見というのは、方向性は市としては決まっているので、これに肉づけするような意見を頂戴できればと思う。 独自に進んでいるものもあり、ディレクターの関係は公募が終わり、第２次選考も終わっている。第１次選考の段階では、まず書類審査を行った。応募は今回19名の方がいらっしゃった。その中で、第１次選考では、まず何といっても人材育成の観点からご年齢や経験なども含めて、レポートの内容。レポートの内容については、これはほかの都市でも非常に頭を悩ませているが、他の国際芸術祭との差別化、さいたま市で行う場合の国際芸術祭としてどういう独自性を出したらいいのかというアイデアをいただきたいというのが１つ。そして、本市にゆかりのあるアーティストの活用策、そして地域資源の活用策。さいたま市の独自性というのは、あくまでもさいたま市が培ってきた今までの文化芸術資源、これをどのように活用して外に発信するか、さいたま市の文化としての外への発信の仕方、これをどういうアイデアをお持ちですかということをレポートに書いていただいた。 そして、本市とのゆかりについて、さいたま市にどういう形で、在住であれば在住、かつてこちらに住んでいたとか、そういうことを含めて、今までのゆかり等も全部含めて第１次選考を行った。 第２次選考では、今度はコミュニケーション能力ということで、顔を合わせながらフェース・ツー・フェースの面で、その方がどういうバランス感覚を持っているかということを含めて、まず第１前提としては、改めてさいたま市についての知識をお持ちか、そして、その中でさまざまなアーティストを活用

	していくためのアイデア、アーティストは自分のいわゆる作品を発出するために、場合によっては法令の規制に違反するようなアイデアも中にはある。ただ、それはいろんなアイデアの中で、さいたま市で展開する場合にはどういう形で実現できるかというバランス能力、アーティストを引き連れるだけのバランス能力、そして現代アートということで、市民にわかりやすい形で言葉で解釈して説明することができるかどうか、そういうコミュニケーション能力を顔を合わせながら確認をした。 　また、テーマ性について、さいたま市で展開する場合には、前回は「未来の発見！」ということで開催したが、それの継続性という点でもお聞きした。今、自分の持っている、さいたま市で次回展開するのであれば、どういうテーマで行うかという考えを伺った上で、そのテーマの前回との継続性という点についても確認した。 　そして、さらにプランとして実現性があるのかどうかということ、それについても確認をした。そして、本人の取り組み意欲、そういうこともさいたま市の国際芸術祭を展開する上でどういう取り組み意欲、何をなし遂げたいか等、確認をして２次選考をし、絞り込みをした。 　最終的には３月の末に、さいたま市の国際芸術祭の実行委員会を行う。その中で、承諾を得るという形で選考をしていくということになる。
委員	このタイミングで２次選考から最後に持っていくかどうか、絞り込むときの何か、こういう人材がいいみたいなことに対して我々の意見というのは言えるのか。
事務局	既に選考のほうは終了しているので、そちらについては言えない。
委員	もう一つお聞きするが、委員に一体何を求めているのか。
事務局	この計画の内容の募集をいただくということではないので、トリエンナーレはディレクターと事務方で進められる事業、現在進めているところである。ディレクターが決まった後には、どういった内容が、求めるものは何なのか。それと、前回トリ

	エンナーレを開催し、今回これからまた開催計画をつくっていくが、冒頭申し上げたとおり、その開催計画の中で、ではどういったところに力を入れるべきなのかとか、さいたま市が国際芸術祭を行う上でこういった面を拾い上げたらどうかとか、そのようなさまざまな意見をいただきたいと思う。 　ディレクターについても、そのディレクターの選定自体は我々が行うので、そのディレクターに何を求めていくべきなのか、そういった意見をいただければと思う。 　テーマについては、プレゼンでいただいているが、必ずしもそれでいくという決定ではない。一アイデアとして、ディレクター選考の選定の評価として、そのテーマ性というのを見たが、そのテーマで必ずこの後国際芸術祭を開催していくのだということまで決まっているわけではない。なので、そこら辺の意見もいただければなと思っているところである。
委員長	質問は尽きないと思うが、この資料１を読んだ印象として、こういうのが欠けているのではないかとか、こういうのをしてほしいといった意見があればお願いしたい。
委員	地方自治体、特に友好都市は、国内に４つあり、それから海外にもある。そういうところとの連携を取り入れていくことも非常に大事かなと思っている。国外では４都市か、５都市、アメリカ、メキシコ、ニュージーランド、中国などがある。そのような都市との連携があるので、そういうところからもやって魅力創出というか、お互いにこういった芸術祭の情報交換をして、外国からさいたま市に送ってもらうとか、そのような発信も大事かなと思っている。
委員長	ほかいかがでしょうか。まだご発言のない方で。よろしいか。
委員	前回の意見交換会で申し上げたが、ロゴについて、資料１の一番最後のスケジュールを見ると、平成30年度の４月から６月にロゴ決定という項目があるが、やはりトリエンナーレからさいたま芸術祭に変わっていくことで、ロゴがまた新しいものに変わると思うが、そのロゴの決定の公募をしたのか、その仕方というのはどういうことなのかというのが１点。

	このロゴというのは、まちなかでバナーとかのぼりとか、一般市民に一番目につきやすい。そのバナー、ロゴを見ることによって、国際芸術祭をやっているのだなというのを知る機会でもあるので、非常に重要なものだと思うが、ぜひ定着するものにしていただければと思う。
委員長	どうか。今考えや計画はあるか。
事務局	前回は、広報戦略というものを策定するに当たって業者委託をした。そのときに受注した業者がアーティストを雇い、そこでロゴをつくっていただいた。事務方に何案か出してもらって、事務方でこれでいこうと決定した経緯がある。 今の段階では、ロゴマークどうやって決めていくか未定だが、恐らく同じような流れを今は想定してる。
委員長	ありがとうございました。どうぞ。
委員	今のロゴについて、テーマも決まらずに、そのロゴをもう一回見直すとかということも考えずにやるのかというのが１つと、先ほどの冒頭にあったオリンピックの組織委員会に、さいたま市としてこのフェスティバルをすると言って、組織委員会の認証を受けるとかいう話があったかと思うが、その日程は一体いつを想定されているか。というのは東京フェスティバルとの関係とか、要は同じようなテーマで、もしできない場合どうするかというのが全くわからない。まず組織委員会への申請はいつごろを想定されているか。
事務局	あくまでも認証を得るために、我々のほうで予算を確保しないとできない。今、国際芸術祭の開催の方向性しか決まっていないので、中身について議論をいただいているが、それが今年の６月に中身を固めて、予算の確保のための補正を組む。そして、いよいよ開催ができるということになったら、国のほうに認定を求める。そして、文化プログラムとして認証されたら、東京フェスティバルの一環として立ち上げる。そのときにマークも使えるということになる。 それと、ロゴについての質問があったが、ロゴは今後、個々

	の業者の方と、ディレクターが決まったら、ディレクターの発想テーマを合わせて、どういうロゴがふさわしいかというのも一緒に協議をしてもらって、ディレクターの考えのもと、ふさわしいロゴにこれから決めていくということになる。
委員	組織委員会の決定出しも６月以降、夏場以降で、それでその前にはもうロゴも全部決めていくというようなスケジュール感か。
事務局	スケジュール的にはそのとおりである。
委員	どうしてもディレクターにこだわってしまうが、今大体絞り込んでいるということで、芹沢さんが顧問と言ったが、もう少し詳しくお聞きしたい。
事務局	参与という言い方だが、アドバイザー的な形である。
委員	それは、どの程度のかかわりか。あくまでも新たに選ばれたディレクターをサポートするようなイメージか。
事務局	そのようなイメージである。
委員	参与のことで言うと、８のところの文章に参与という言葉が出てくるが、それは芹沢ディレクターのことか。
事務局	そのとおり。
委員	やはりディレクターは非常に重要で、現在のトリエンナーレもその芹沢ディレクターを主として行われて、色々な企画とか、それはやはり色々な形の経験ということからきっと反映させてきていて、今回若手を、あえて地元に詳しいとか地元に所属しているとかというのも前提で、ある程度絞り込まれているというところで、私たちとすると、あくまでも事務方である程度そこまで絞り込んできたという、大変失礼な言い方に聞こえてしまう、私たちとみんな一緒にしてはまずいと思う。私とすると、行政とか事務方の皆さんが絞り込んでくるというのは、余りお

	もしろくないのではないかというところが正直な本音である。 　なぜかというと、さっきの法令的なものとか、色々な制約とか、そういうものというのは当然ある。それで、私たちが考えるときというのは、余りそういうことは考えない。だから、実際に事務方の方とか行政の方というのは、色々なそういうことも、トラブルが起きないようにとか、色々な観点から選ばれて絞り込んできているとは思うが、ただ内容的なものというと、果たしてどうなのだろうという、失礼な言い方かもしれないが、考えてしまうのが本音で、やはり芸術祭とかトリエンナーレとかそういう文化面のものというのは、何が一番重要かというと、確かにそういう法令的なものとか色々なものは当然、国家であるわけだから守らなければいけない部分であるが、この分野は、逆に言えばそういうものに反するものがおもしろいというところのテーマで行われてくるのが、大体現代美術的なものも含めて多いわけである。
委員	要はどこかの段階で最終決定をする前に、当然キャラクターもオリンピックのロゴもそうだが、名前を出すというところでオープンにして、投票なり何なりという方式に変えたわけである。最初トラブルもあったと思う。まだ絞り込みはされているかもしれないが、その絞り込みの段階で何人に絞り込んでいくのか。
事務局	最終的には１人に絞り込む。
委員	ある程度絞り込んだときに、大体決めたものをオープンにして、何らかの形で私たちの目に触れて意見を述べるのなら、その意見も良いと思うが、今ここに来たら、もう絞り込まれたということなので、残念である。
事務局	私たちとしても、文化面では素人なので、そういったところもあるが、一方で前回の国際芸術祭のときには、アーティスト側で利益を回し合っているのではないか、お互いに知り合いを呼んできて利益を回しているのではないか等、色々な意見もあった。なので、今回はできるだけ客観的に公正、公平に選んだというやり方をしたかった。

	そこで、我々が選定基準というのをつくるに当たって有識者会議というのを設けた。そこにはアーティストのほか、大学の教授もいる。そこで、ディレクターに求める基準はどうなのかという意見をいただき、事務方で考えた基準と突合させながら、今回はその選定基準というのをつくって絞り込みを行った。そのため、一方的に事務局だけでやっているというわけではない。
委員	ロゴも公募にできないか。
事務局	ロゴは、ロゴマークというのがテーマ性とかなり関連してくる。
委員	テーマを持ってロゴを公募するというケースは多いか。
事務局	ディレクターの考えもあると思う。
委員	前回、覚えていないが、個人的にはおもしろくなかったと思う。記憶にないということは、おもしろくないということだと思う。何か様々な色が入っていたような気がするが、合っているか。
事務局	合っている。ひし形で虹色のマークである。
委員	白黒だと全然おもしろくない。やはりロゴはもっとわかりやすくなければいけないと思う。たかがロゴだが、されどロゴである。ものすごい大事である。自分達のジャンルで言ったら、もうロゴこそというぐらいの気持ちである。 戦略としては、絶対ロゴというのは、もっと天井に持ってこなければいけないものである。公募が理想的か、どういう方法かわからないが、ロゴに関しては、もっと目立ち、騒ぐように、結果的には市民が騒いでいたとは全然思えない。
事務局	まだロゴは何も決まっていない。 開催計画の中身も決まっていない。テーマも決まっていない。
委員	今はキャラクター時代なので、イメージキャラクター等、何

	でもいい。
事務局	イメージキャラクターも決まっていない。
委員	そういう何か絵、描きたいなと思ってしまう。だから、そういう何か、盛り上げ方が前回なかったというのがやはり反省としてあるのだったら、ぜひそういうのを取り上げたいと思う。
委員	知識がなくて申し訳ないが、有識者会議は、もう設置されているか。 メンバーというのは、ここでは発表できるのか。 それと、有識者会議は、とりあえず会議自体はオープンになっているか。議事録は残っているかというのを全部教えて欲しい。
事務局	有識者会議は６名から成っており、今お座りになられている石上先生、それと議長が芹沢元ディレクター、芝浦工大の澤田先生、アーティストである南区在住の小沢さん、京都府立大の専任講師である松田さん、事務局長の大西部長である。この６名がオープンの形で、既に２回行った。議事概要は、作成している。
委員	議事録は、発表はしていないのか。
事務局	作成はして、今準備しているが、発表はしていない。
委員長	メンバーの一人として印象を申し上げると、お客さんはいらっしゃっている。会場に意見を求めたりすることもあるし、そもそも論から壮大な話までしゃべらせてもらっている。そこで余り恣意的な話とかはないので、色々な話は出ているが、どう活用されるかはわからない。
委員	では、ディレクターの選定のところもかかわっているのか。
事務局	意見をいただいたというところで、そこの意見をどこまで採用するかは事務方に任せている。

委員長	そろそろ予定した時間が来ているが、この議題については、どなたかいるか。
委員	私は集約のことについて、やはり分散と集約は大事だなということで、５番の会場だが、この決まった経緯について説明をいただければと思う。
事務局	会場について、前回は大宮と岩槻と、武蔵浦和という３エリアだった。前回なかなか１日で回れないということで意見があった。ただ、我々は回遊していただいて、いろんなところを、さいたま市はこんなに色々あるのだということを知っていただきたいためにも３会場をわざとばらした。ただ、やはり１カ所のほうが見やすい。 そういう中に、ちょうど大宮区役所が移転をする。大宮のまちづくりの中で再編成するということで、会場に使えるということが、情報としてあったので、この大宮区役所の最後を飾るということで、この全部を会場にして、併せて大宮は図書館も移転ということで空くので、この建物も使えると。そうすると、大宮図書館、大宮区役所、あと我々が持っている市民会館おおみやというところもあるので、そういうエリアを使い、回遊性のエリアは狭くなるが、逆に言うと足が運びやすい、エリアの中で作品を展開していくということで大宮エリア、ここを一つのエリアとして活用した。 そのほかに拠点として、中央区にあるさいたま芸術劇場、また南区にある文化センター、こちらも拠点として、施設なので活用する。１つのエリアと２つの会場、今回の開催エリアとしてまとめたところである。
委員長	よろしいか。どうぞ。
委員	１番の名称にこだわるのだが、国際という形で捉えていて、さいたまでということで海外にという発信をして、それらを呼び込みたいという形でいく場合に、たまたま大宮エリアの区役所が解体されて移転があるという形で、そこに重ねてやるという方法なのか。私の場合、やはりさいたまアリーナという頭が

	ある。そこの集約でエリアを、北与野と新都心のエリアを活用していく。私のずっと言っていることは、例えばさいたまの特色ということで鉄道とかそういう博物館とか、今度は人形会館も博物館ができるということで、それは分散会場としてあってしかるべきだと私は思う。集約して、そこから見に行く。興味のある人たちは見に行くといったほうが、より機能的という感じになると思う。 　同じようにまた分散して、果たしてこれが根拠があるのかないのか、やったからやるという感じなのかというのが疑問に思ったので、できれば続けるのだったら、ただ私はオリンピックに重ねているから競技会場になって使えないということもあるのではないかなということは思ったが、もしできればそういう会場でいいのかなというのはいまだに思っている。
事務局	そのようなやり方もあると思う。ただ、オリンピックのときは恐らく使えない。１年前から、多分押さえてしまうのだと思う。新都心の場合。なので、今回外させていただいているが、これから国際芸術祭を続けていくに当たっては、やはり拠点会場というのは必要だと思っている。美術館等あるが、そんな大きくないので、どこか拠点というのを考えていかなければいけないのかなと思っている。なので今の委員の意見も考えられると思う。
委員	芸術祭を開催するということはもう決まっていることなので、それに対しての今回の会議だというのはわかっているが、疑問として、さいたまの文化を支えるようなことを要するに発信する等もそうだが、やはり土台になる人材を育てないとできないのではないか思う。何となく小学校の学芸会か何かで、先生やそういう人たちがやるぞと言って、テーマはこれだと言って、そこで、あなたこれやってあれやってと決めて、果たして全員の人が、僕たちはちゃんと学芸会うまくいったかどうか、参加したかどうか、楽しかったから次回またやろうと。今度は先生たちがいなくても、自分たちでやろうとか、そういう雰囲気に持っていかないと、育たないのではないかと思う。 　とにかく子供を育てなければいけない。子供の何というか、意識というのではなく、もう肌で普通になるような感じで、芸

	術という形をとらなくても何でもいいと思う。僕これ好きだ、私これ大事とかというので、どんどん参加できるようなものに、10年計画かもしれないが、そういうものを持っていかないと、いつまでたっても、育たないのではないかと思う。なので、この目的のところで、まず人材、これをプロジェクトか何かと同時に発足させてやっていくというところで随分違うと思う。 　それで、もう一つあるが、年齢的に自分の時間が持てるようになり、色々なところに参加するのだが、周りがとても皆さん郷土愛が強い方多いが、いつも同じようなメンバーだったりする。それで、そういう方がこうですと説明したりすると、それに参加する人もたくさんいる。しかし、自分でやろうとはなかなかしない。見ていると、何でだろうと。やはり、専門家とかそういうのは関係なくて、自分でやることが楽しいということを忘れてしまったかなと思っている。 　年の行った60代から70代の方、とっても今お元気でいろんなことをやって、サークルなんかも同じようなテーマを区ごとに競争している。それは一つにまとまらないので、さいたま芸術祭はうまくいかないなという感じを持った。
事務局	まさしくそうだと思う。ぜひ子供たちの参画も考えていきたい。 　３年に１度の打ち上げ花火的なものだと何もならないと思っている。これを一つの起爆剤として、より市内の文化芸術活動が盛んになっていくことが本来の目的なのかなという気もするので、トリエンナーレ、国際芸術祭に参加することによって文化芸術に興味を持ったり、触れてみたいと思った人たちの受け皿というか、これから充実をしていかなければいけないと我々も思う。ここがしっかりしないと、これを開催していく意義そのものにもかかわってくることなのかなということで、ぜひ子供たちの参画を今回の芸術祭でも考えていきたいと思う。
委員	子供の参画について、今回オリンピックのキャラクター、全国の小学校のクラスごとの公募という形をやった。あの発表会のときに、やはり一番主導をとっていたのが宮田亮平さんという、文化庁の長官である。宮田さんは自分の学校の先輩だが、若いころから実はよく知っている。非常に若いころから、気配

	りの人だった。非常にあちこちに気を使って、自分は年も下なのだけれども、やはりちゃんと丁寧に、印象はもちろん悪くない。 　それで、芸大の学長をされて、今文化庁の長官までなった方だが、要するにあの方は、やはりかなりのアイデアマンで、多分小学校の子供たちにキャラクターを選ばせれば、恐らく私たち親とすれば、子供が選んだものだからという形はやはり思うわけである。それで子供たちにとってみれば、ああいう３パターンをそれぞれ見て、それでクラスの中で、今でこそポケモンとかに確かに似てはいるが、そういうので子供たちの話題になっている。それで、自分はこれがいいとか、やはりそういう話題性のつくり方というのは天才的だと思う。 　だから、やはり前回のトリエンナーレは、知られていないと思う。特に私はＰＴＡ関連でいたので、お母様方に聞いても、トリエンナーレの言葉すら知らなかったというのが現状で、そこが大変残念だった。 　だから、やはり子供たちがかかわれる部分で、ロゴもまだ間に合うならいいが、間に合うかどうか、それは別として色々なアイデアがあると思うが、やはりもっとオープン的なもので、明るいイメージにしていかないと、何か重苦しいものになってしまうというのが、心配している。
委員	世界盆栽大会で世界各地から色々いい意見をいただいたが、その中で、子供の盆栽の展示が非常に話題になった。大宮の植竹小学校が中心になったが、今はもっと他校でもやっていただいている。年々歳々非常に広がっていて、要するに反響をさらに大きく輪を広げたいと思っており、現在大宮の盆栽美術館のほかに、ワシントンＤＣとかカナダのモントリオールの美術館にも日本から五十何人送っている。それから最近オーストラリアのキャンベルも美術館を持っている。中国、ヨーロッパと。そういう中で、サミットのようなものをこの機会にやったらどうかなと、考えている。 　それから、中心的な話題を深掘りするには、我々さいたま市の中の文化芸術クラブの方々の結集した輪を１つ例に挙げて申し上げたいと思うが、盆栽というのは和の建築の床の間飾りが一つの約束事になっており、実際大宮の美術館の中に真・行・

	草の床の間をつくっていただいている。その作品の場に、約束事として背景に掛け軸を使う。その掛け軸も、絵画の先生方とか書道の先生方とか、盆栽を見て何を感じたとか、四季の風景あるいは背景の色とか、あるいは添景の飾りとして人形とか彫刻の分野の方々の、今年で言えば何年だからこういうものを作品のそばに添えるとか、総合的な場所を１回、ぜひいい場所をつくっていただきたいと思う。そうすれば、お互いに美術の交流になるし、市民の方々の理解も深くなっていくだろうと思う。 　そして、文化というのはやはりお金がかかる。そこをけちってはだめだと思う。なので、総花的なことは何回やっても効果が出ない。集中的なものを、今年はこれをテーマにしてやっていく。それに向かって、市民が結集してやった結果、全世界に発信力も出るし、市民の色々な方々に理解もいただけるのではないかと思う。 　なので、ここのメイン会場が区役所というのは、そのような効果が出るのかどうか、第１回世界盆栽大会を28年前に開催したとき、ソニックシティの会場を使った。ところが、評判が非常に悪かった。細切れの部屋ばかりだった。階段で上り降りも、みんな途中で面倒くさいと嫌になってしまう。小部屋なので、何をやってもうまく見えない。なので、空間とか間とかというのは、物を飾る場合や見ていただく場合非常に大事なものである。そういうことを背景に考えていただけるディレクターであって欲しいと思う。 　地球上の民族が、こんなおもしろいものが日本のさいたま市にあるというような、そういう角度に捉えて電波に乗るような、芸術祭に育ってほしいと、切にそう願っている。ぜひそういう日本の生活様式の文化性の高いところの部屋をつくって、それを飾っていただいて、本市を紹介していくというような類いを検討いただきたいと思う。お金を集中的に使って、そういうところにかけてもらいたいというのが協会の願いである。
委員長	ありがとうございます。 　大変恐縮だが、以上で（１）の国際芸術祭開催概要については終了させていただきたいと思う。 　それでは、次に（２）、基金を活用した市民文化活動の支援事業について、事務局から説明をお願いしたい。

事務局	＜事務局より説明＞ ・資料２－１「基金を活用した市民文化活動の支援の強化」、資料２－２「市が行っている主な事業一覧」に基づき説明
委員長	説明が終わった。ただいまの事務局の説明に対する質問等も含めて、何か意見はあるか。なかなか理解するのは難しいところだと思うが、新たな文化活動の新規事業を実施するということなので、ここにない、何かこういうのがあったらいいのではないかという意見がいただければいいのではないかと思う。 はい、どうぞ。
委員	先ほどの説明の中に、この基金については今まではたしか資料の購入等色々あったが、用途はある程度限定されていたと思うのだが、前回聞いたときには基金として３億ぐらいあると聞いていたが、今はどうか。 それから、そうなってくると要するに使う用途が広くなってきたと。その用途が広がったものは、一体どんなものに使えるのかというのを知りたいと思うし、そうなってくると市の積み立てというのは今までよりも、より積み立ての額を上げていかないといけないのだろうと思うが、その辺のことをお聞きしたい。
事務局	平成26年度まで文化財産の取得の基金ということで、文化財産の取得だけになっていた。そこで、27年度に、先ほどの資料の２―１右側に図があり、文化財産の取得ということが左側にあるが、そのほかに市民の文化芸術活動に対する支援、こちらは補助金とか活動の場所とか、先ほどあったが、広報とか、どういう形が支援として芸術拡充が図れるか、また、これは東京2020大会の文化プログラムとしてどういうものに、その事業に対して基金を当て込むという、今までの文化財産の取得だけではなくて、基金を使うことにより、文化財産の取得のほうが削られたりしないようにしたい。文化振興を図っていくということが大もとの基金の目的だが、この文化財産取得以外の用途についても基金を活用していきたい。 残高は３億となる。26年度から３億あり、そこから積み増し

	をしたが、またトリエンナーレの関係で取崩したので、大体３億円となっている。 　積み立ての考え方だが、積み立てをして文化の振興の基金として活用したいため、文化部としては積み立てをしていきたい。今は３億しかないが、さらに拡充を図っていきたいと考えている。
事務局	補足をすると、基金をつくった時は文化財産を購入するだけだった。ソフト事業にも使えるように、使途を新たに追加をした。それをどういった事業に使っていくのがいいのかという意見をいただきたいというのと、その積み立ても不定期なため、財政側のほうで不用額が出たときとか、そのような時に積んでくれてとなって、システム化はまだされていない。これも考えていかなければいけないことである。
委員長	よろしいか。まだ発言のない方で何かないか。
委員	やはり国際芸術祭の中で言うと、市民への気運の醸成というのも一つ大きな目標というか、やらなければならないことの一つだと思うが、せっかく色々な事業に補助金や基金が使われるということなので、これをもとに例えばこのさいたま国際芸術祭に参画できるだとか、何かしらの形でつながるような形にはなっているのか。 　例えば、資料２―２で様々なコンテンツがあるかと思うが、そういったところから、国際芸術祭のほうに展示をされるだとか、そのような関わり方というのがどのようなことになるのか、教えていただければと思う。
事務局	芸術祭と基金は、直接はリンクしていないが、そういったこともあり得ると思う。芸術祭へ参加するアーティスト、例えば市民団体が国際芸術祭へ参加するに当たっての資金援助ということで基金から出すという選択もあるとは思うが、まだ実際行ったことはない。どういうスキームをしていくのかという出し方の話もあるし、先ほど言った積み立ての話もある。今後ソフト事業に使っていきたいなと思っているが、どういうやり方がいいのか、どういうアイデアがあるのかというのを、繰り返し

	になるが、意見をいただければと思う。
委員長	参考として、市が行っている主な事業があって、それを広げていくというアイデアもあるだろうし、ここにないものを何かここから発展してやらせていくということもあり得ると思う。
事務局	１つ補足すると、ハード事業に使うつもりはない。施設建築には使うつもりはないので、あくまでソフトの方と文化財産等の使途、この２本で基金は運用していきたいと思う。
委員長	はい、どうぞ。
委員	ハードの考え方で、こういう事業を見ていると、色々な取り組みをされているなというのはわかる。ところが、我々普通の市民からすると、そういう情報がなかなか全部はわからないと思う。例えば、広報紙は時間があるので、ゆっくり見る。あるいは色々な施設に行って差し込みのチラシ等もある。今や情報化社会になっているので、自分の好みが、例えば何かの端末の前に立てば、好みが出てきて、自販機でもできるようになったら、こういう取り組みはありかなと思う。 情報社会は、今どこまで進んでいるか。知らない人も、多分乗りおくれているのだと思うが、今の最先端は、すごいところまで行っているのではないかと思う。だからこういう取り組みは、もうこれから多く出てくると思う。しかし、やりたい人だけがやるのではなく、広く広げていかないといけない。だから、広くセレクトしないといけない。もうテレビとかラジオのメディアだけでは済まないと思う。それは広報紙のあり方もそうだし、そういうチラシの部分でもそうだと思う。そういうところに、この基金を使えないのかなと思ったが、ハードをしないと言っているからいいが、意見で言っておく。
委員	スマホがこれだけ普及して、今は何でもスマホだと思う。さいたま市なのか埼玉県なのか忘れたが、何か情報を、地震等も含めて、取得できるサービスはなかったか。さいたま市でそのようなサービスはなかったか。やはり紙物で配っているというのは、今は少し違うのかなというか、お年寄りばかり見てしま

	う。端から端まで見る方もいらっしゃるけれども、そういう発信の仕方は、行政の何かイベントは広報というか、それこそディレクターの公募だって知らなかった。 　だから、そういうのがもっとしっかりと本当に市民に、何だ知っていればというような人もいるかもしれないし、というような部分が１つあって、だからデジタルという部分は、やはりもう全国というか世界中がそうなっているわけなので、さいたま市も、ここは遅れをとってはいけないのではないかなと感じている。だからそういう意味では色々なところでお話する機会が多いので、電波を通じて、及ばずながら協力は惜しまずという気はある。 　結局先ほど意見の出ていた子供の育成ということを１つとっても、これはやはりこの中に基金を使っての事業の中にも子供の育成というのが多くあって、子供の育成のために、子供の芸術育成のために色々な事業があり、それはそれで、国際芸術祭は芸術祭である。これは、お金のやりとりの立場としてはそうだというのは認識するが、それこそソフトの意味合いからしたら、それはそれ、これはこれでは決してなくて、だからもう頭の中に降って湧いたようなさいたま国際、だからトリエンナーレというのはまだ２回目なので、しようがないといえばしようがないかもしれないが、本望からすれば、以前から行われている市の事業だとか、そういうものの蓄積がさいたま国際芸術祭というところで花開くという形で、それで世界に向けて初めて発信できるので、これとこれは全くリンクしていないという話でこれから先も進むのだったら、もう本当にさいたまの芸術は育たないと思う。 　だから、そういうハードの面とソフトの面という言い方もよくわからないが、それはそれ、これはこれと言われてしまうとどうなのか。むしろ基金の側に、今度ディレクターが必要なのではないかと思うくらいである。何か全体に対して散らばせて、例えば音楽一つにとっても、全部いいことだが、多分全国的にどこでもやっていることである。さいたま市として、あるいはもしかしたら国際芸術祭を見据えて、この色々な基金の事業というのを繋げて考えられるのだったら、もっと子供たちに興味を持たせて、国際芸術祭、さいたまの芸術というのはどういうことなのだということが考えられるように、もっと中身だって

	考えることができるし、そういうことを考えながら、いろんなところでいろんな活動もしているし、だからクラシック音楽会をやるのはすばらしいことだが、それを果たして子供がただ聞くだけでいいのかということだって、一つ一つとれば色々あると思う。 　鉄道一つとっても、やはり鉄道も模型というか、ジオラマというか、見るだけでわくわくする。そういう要素が、ひとつ何かさいたまにこういうものがあるのだなと、子供にすごくわかりやすく伝わるものがあり、それが一つ一つコンテンツを考えて、基金だから、そういうものを絞り込んで、もっと深いところで子供のためにどうあるべきか。もちろん子供だけではないが、言うことを考えて、そういう蓄積が３年に１度訪れるさいたま国際芸術祭というものに繋がっていかなかったら全く意味がないと思う。
委員	つい越してきたばかりで、助かった。本当にそのとおりだと思っていて、市民にとって身近にあるこういったことが、さいたまの国際芸術祭の方に発展していくということが、一番の近道なのではないかなと思うので、意見をさせていただいた次第である。
委員長	一応入っているテーマになっているが、本当にリンクしているかというとなかなか難しい。そこをどうリンクしていくかというのは課題であると思う。例えば、そのときにこの新しくおこされるであろう20の事業がどうなるとハードになっていくのかという気がしている。
委員	子供たちの参加者制、一体となってやっていく、年代を広げて一体となってやっていく、すばらしいことだと思うが、やはり学校教育の中にそういう項目が時代とともに変化して、項目が入ってくるような、学校は学校の教育と固定化しないで、時代とともに地域とともにある教育、そういうものを柔軟的な姿勢を持って抱き込んで協力してもらうということは必要だと思う。例えばどういう、ささいなことであってもこれが地域に結びついているということを子供たちにも知らせるいい機会だと思う。ぜひ子供は子供、自主性に任せるのではなく、教育の中

	にそれを無理のないようにうまく取り入れていく。 　それは、どこの地域にあったって必要なことだと思う。さいたま市は非常に教育的な面で好感を持たれていて、ＰＲが非常に行き届き、転入生が非常に多いというすばらしい話も聞いたが、そういう面で、開かれた教育、現代に合った教育、これはぜひひとつ教育面を多くＰＲしてもらいたいと思う。
委員長	ほかよろしいか。 　はい、どうぞ。
委員	事業の一覧のトップにさいたま市美術展覧会とある。まず一番さいたま市としての美術の展覧会のフレームとして行われている部分だと思うが、先日、関係者とお会いして、それで個人的に美術教室をやってるので、生徒がこの展覧会に出品してくれないかという話をされた。 　なぜかと聞いたら、特に彫刻の出展が少ないという話で、そんな話をしていて、今回こういう会議があるという話で、その時に話をしてもらっても構わないということで、うちは大人の教室から子供の教室まであるが、大人の場合は趣味で老後を楽しむためとか、いろんな目的があるけれども、特に彫刻の場合は県展に出される方が多い。多いといっても、そんなに大々的にやっているわけではないが、過去20年ぐらいやっているので、実際生徒さんの中には知事賞や議長賞など賞をとられる方もいて、それでそういう方たちに市展も出してもらえないだろうかと話されて、生徒さんに話すと、やはり市展よりは県展にというふうに選択してしまう。 　だから、別に下に見るとか上に見るとかということではなく、生徒さんの本音で言ってしまうと、市展を通り越して県展という形で、それはスタンスがそれぞれ違うのもあり、別にレベルが高いとか低いとかそういうことではなく、市展の良さというのは、そういう意味では割とハードルを下げているから、色々なこういう創作活動をされている市民たちの発表の場でもあるということで、やはり県展と比較する必要は全然ないが、ただ一つにはどうしてもこの市展というのは、色々な市町村も含めて県展の下にある地域の展覧会という位置づけにどうしてもなってしまうのは仕方のないことで、でも反対に言ってしまうと

	さっきの子供のことというのは色々な課題が出てきて、これを見ると15歳以上の市内在住、在勤の中学生を除くとか、やはり年齢制限されている。 　だから、一つのソフトとして市展は、もっと根本的に考え方を変えてみたらいかがかなという、そのためにそういう予算的なものも何か活用するような形で、さいたま市独自の視点というのをそろそろ考えないと、出品者も減っていくし、場合によっては子供も含めて参加させるような何かうまい考えがあればと思う。 　子供たちの展覧会というのは、学校ごとに確かにあるが、知っている限りでは区役所の中とか、小学校のグラウンドの一部、コミュニティセンターの一部で行われている。しかし、一つに美術館に展示をさせてあげるということにより、子供のころ見たという印象的なものも含め、意識が変わるというような気がする。 　だから、一番トップに来る市展も、一つにはさいたま市独自の、もうほかを真似する必要もないし、逆に言えばさいたま市は子供を大事にしているというのを前提にしながら、何かそういう企画という方向に舵をとるようにできばいいかなと考えた。
委員長	ありがとうございます。子供の展示に関して言うと、うらわ美術館でやっている。 　市展を新しい形にというのは、これからの課題だろうと思う。 　時間が来たようなので、最後でお願いしたい。
委員	３番の活動場所の支援だが、目的からするとまちの活性化につながると思う。実は、まちの中にビルの空き室や空き家が増えている。さらに、カフェやレストラン、こういうところを活用して場所の提供、これに対する支援ができるかだと思う。 　というのは、横浜によく行くのだが、横浜では民間のビルの一室を展示施設として開放している。逆に私は埼玉近代美術館のほうで写真のほうをやっているので、そこでやると人を呼ぶが、来てもらっても、ではどこへ行くかということになり、あそこから浦和まで歩く間に何もないなと思う。市役所の前の鐘について質問されること等はあるが、そういう点で横浜に比べ

	文化、歴史的なものが少し足らないかなということは切実に感じている。 　そういう意味で、市民の中にこういう芸術文化を根づかせる一つの方法として、民間のビルの空き室だとか空き家をこういった提供場所に、市の支援として活用できないかということを、考えていただければと思っている。
委員	それについて、おもしろい提案がある。 　現在、県展、市展、それをたたき台にして中央展のほうに進出する、そういう作家たちがさいたま市、浦和に多く住んでいる。昔から数を物すごく抱えている。それで、そういう方の作品が、今こういう時代だから全然流通しない、動かない。倉庫にみんな眠っている。それで、まちのそういうカフェに無料で差し上げようではないかという話まで出ている。それを公開すれば、多少絵の具代ぐらい、では絵の具代ぐらい出しても、この絵が、これが欲しいという、あるいはそういう下心と言っては汚いが、そういう機会に恵まれるのではないかという話を仲間とするときがあるが、これはなかなかおもしろい話だと思う。 　そして、徐々に絵というものが生活の中にしみわたっていけば、全体の文化のレベルも上がるし、どこのうちに行ったらとても気に入った絵が掛けてあるから、あれがずっと印象に残っていて、あの作家は何という人だというような話から、いい会話もできるのではないかという話を、仲間同士でしているのだが、いかがなものか。非常に作品が今多く眠っている。 　ご存じだと思うが、浦和というところは昔から絵描きが、非常に文化の高い歴史をつくっていってくれている。名前を挙げればもう枚挙にいとまがないほど。ぜひ一つそういうことを踏まえて紹介したいと思った。
委員長	ありがとうございます。 　時間が来ているので、基金を活用した市民文化活動の支援事業については以上で終了させていただく。 　それでは、全ての意見交換が終了したので、進行を事務局にお返しする。

（５）その他

事務局より事務連絡

７　閉会

さいたま市スポーツ文化局文化部文化振興課
電話８２９－１２２６
Fax８２９－１９９６

平成 30 年 3 月 7 日開催　文化芸術に関する意見交換会　　意見書概要

1　さいたま国際芸術祭（開催概要）について

・引き続き「アートプロジェクト」「市民プロジェクト」「連携プロジェクト」が開催概要に掲げられている点は良いと思う。ただ前回は「アートプロジェクト」と他のプロジェクトが乖離してしまっていたので、新しいディレクターにはそこを工夫してほしいと思う。具体的には、アートプロジェクトに位置づいていたサポーター組織を「市民プロジェクト」とつなぐメディアとして活用し、様々なプロジェクトがつながっている実感が喚起されることを希望する。

・「連携プロジェクト」について、前回は連携する施設によってかなり温度差があったので、早い段階から個々の施設と協同して芸術祭全体を盛り上げる仕掛けや組織が必要なのではないかと考える。それぞれの施設にも予定があるので、企画依頼を余裕をもって行うなど、工夫が必要だと思う。

・学校との連携について、学校教育現場にアーティストを派遣する事業を実施してほしいと思う。前述と同様に教育現場は組織の特殊性が強いので、十分配慮して連携を図っていただきたい。現在、市教育委員会においてアーティスト派遣事業を計画しているらしいが、予算措置がままならず、苦労しているとのこと。このような動きと連携することで、実りの多いアーティスト派遣事業を実現していただきたい。

・「住みたい街ランキング」で今年の関東圏トップ１０で９位に大宮、１０位に浦和がランクインした。９位の大宮は１３の路線が走る交通アクセスの良さ、１０位の浦和は文教都市で落ち着いた住宅の街並みなどが評価されてのことだったらしいが、それだけでなく文化芸術に関する取組みや、盆栽、人形、漫画、鉄道などの魅力的な資源、サッカーを初めとしたスポーツがさかんなこと、などさまざまな要因があって、それぞれの良さにつながったらからだと思う。さいたま国際芸術祭を成功させ、「生き生きと心豊かに暮らせる文化芸術都市」が実現されれば、また一つ市の魅力につながり、さらに「住みたい街」「魅力ある街」になっていくのではないかと考える。

・市民一人一人（特に子供たち）にも国際芸術祭に参加できる機会を創出していただきたい。「自分も参加している」「自分たちもこの芸術祭を創り上げている」ということが、モチベーションの向上につながると思う。基金もそのために有効に使って欲しい。

・前回の「さいたまトリエンナーレ」が「さいたま国際芸術祭」へ変更されたことの理由を明示すべきだと思う。この変更理由を明示しないと、「さいたまトリエンナーレ」と「さいたま国際芸術祭」を混同する人がいると思う。

・さいたま市が国内外にアピールできるものは、地域の歴史・伝統・文化のある「盆

栽」「漫画（アニメ）」「人形」「鉄道」だと考える。集約について今回は諸事情により大宮エリアだが、やはりメイン会場は知名度の高い”スーパーアリーナ”とその周辺エリア（北与野～新都心）だと思う。
開催期間中は各施設の展示をスーパーアリーナに集中させ、子ども広場遊び空間を併設するべきだと思う。

・公募によるディレクター選考について、総予算が５～６億円かかるイベントの中心になるディレクター選考にしては選考時間が短すぎはしないか、しっかりと吟味できたのか、という印象を受けた。

・行政側が形式だけの意見交換会を求めているのだったら仕方がないが、そうでなければ僅か１４名の委員全員にディレクター公募の告示について知らせる手段はなかったものか。既に決定されてしまった事柄について委員の意見を求めるのはこの意見交換会自体を軽んじていると思う。
２０２０年東京オリンピックではシンボルマーク、国立競技場等のデザイン・設計等の選考方法で世論の指示を得られなかった結果、キャラクターは全国の小学生による選考方法を行い話題になった。
今の世相は法的に問題がないとか公示してると言っても SNS 等で話題になると一気に広がる要素を含んでいるため、非常に危惧される。

・前回のさいたまトリエンナーレは７月の意見交換会で数字的（金銭、来場者数等）には成功であったという説明があったが、SNS 等ではさいたまトリエンナーレは失敗だったという主旨のものも今でも閲覧できる。これも個人的には現代美術という難解なジャンルを中心にいろいろな形に組み立てていくディレクターは知識・経験・コミュニケーション能力等計り知れない才能を要求される。ただ、対象は美術の専門家でもなければアーティストでもない一般の老若男女であり、ましてや多額な税金を投入するからにはディレクターも辛口の批判は覚悟が必要である。

・今回の国際芸術祭は地元出身の若手ディレクターを採用するゆえに力不足を補うためにサポートする後見役・サポートを置く旨も説明され、前述にも記したが前回のトリエンナーレ・ディレクター芹沢氏が就任することが決定されているそうだ。この点についても（芹沢氏については個人的には他意は無いが）選ばれた若手ディレクターが自分の考えている構想が実現できるのか心配である。
悪くいえば芹沢氏に関わりのある人物が選ばれたのでは、と想像する方々も必ず存在すると考える。
前述の二項目について私自身が？マークをもってしまうくらいであるから、その辺の説明はきちんと市民にできるよう対応することを希望する。
意見交換会が委員と事務方の疑問を持つやり取りのみで終始してしまうのは本意ではない。

・今後決められるであろうテーマについて、今回の意見交換会で出た児童や子供の参加できる機会をぜひ考慮して頂きたい。

2　基金を活用した市民文化活動の支援事業について

・さいたま市独自の「アーティスト・イン・レジデンス事業」を立ち上げてほしいと考える。具体的には、アーティストに半年間程度、市内に滞在して作品を制作してもらうとともに、定期的に市民と交流するワークショップを開催することと、最終的に市内で作品発表を行うということを義務とする事業として世界公募を実施する。アーティストには企画提案として応募してもらい、数名のアーティストを選出し、市はアーティストと協同して提案された企画を実現していくという事業をイメージしている。この事業の趣旨は、既存の市民の文化活動を支援するのではなく、広く外部からの文化的な刺激を取り入れることで、さいたま市の文化的な潜在能力を発掘するとともに、市民の文化力を向上することを主眼においている。

・現在特定の美術団体に委託して実施している「市展」の改革が必要と考える。現代社会における市民の芸術表現のジャンルは多岐にわたっており、現在の「市展」のラインナップには偏りがあると言わざるを得ない。そこで、現在の「市展」はそのままにして、そこに含まれないジャンルの発表の機会として新しい「市展」を創設してはどうか。

・文化活動の支援には費用がかかるため、市の積立金の拡大、公的な助成金の活用、企業等の協賛・協力が大いに必要である。そのためには、相手を納得させる企画・説得力・広報の力が大切である。前回のさいたまトリエンナーレでは「知らない」が多くあったので、すべての情報を利用して、広報活動を展開することが必要だと思う。

・活動履歴だけでなく最近の活動の有無や社会性も考慮の上、支援するのが良いと思う。

・多くの市民に広く様々なことが行き渡るように新しい広報活動について検討して欲しい。（文化振興課だけの取り組みではないと思うが）

3　施策集について

・施策１から６までは、おおむね順調な取り組みが続いていて、成果を挙げているように感じられる。ただし施策７「文化芸術活動の場となる施設の機能向上・充実」については、やや不十分と言わざるを得ない。真摯に努力していることは理解できるが、肌感覚としては疑問を感じることがある。具体的には施設の貸し出し備品が壊れていたり、バリアフリー化が不十分だったりする箇所が散見される。またインターネットを通じた「情報発信」や「予約システム」などについても、決して使いやすいとは言い難く、大幅な改善の余地が見られる。

・重点プロジェクトについては、１と２はトリエンナーレとの関係で（件数的には振るわないが）充実した成果を上げているように感じられる。ただ３の「さいたま市の文化資源の活用と発信」については、件数の多さに反して内容的には不十分と感じる。特に各施設やそれぞれの領域を連携させる取り組みについては減少傾向にあり、工夫の余地を感じる。例えば、「盆栽」「漫画」「人形」「鉄道」に通底するキーワードを探る研究（勉強会やシンポジウム等）の機会を促進し、得られた知見に基づいたイベントを開催、広く内外にアピールする事業を展開することに活路があるのではないかと考える。

・計画の中で、事前にわかるものについては、情報を伝達してほしい。大切な税金で賄っているので、市民の理解・納得を得る施策であってほしい。

・30 年度の施策について、29 年度の成果実績をよく吟味して策定して頂ければと思う。